

巴里に届けられた 鶴見の様子



鶴見にあった佐藤美子の自宅 昭和初期か(佐藤美子資料)

昭和期に活躍した、横浜在住の声楽家に佐藤美子がいる。美子は、一九二八(昭和三)年一二月に日本を出発し、三二年六月に帰国するまでフランスに留学していた。この間に美子に届いた手紙類が、自宅の父母からの手紙を中心に、「佐藤美子資料」に綴とされて残されている(資料番号Ⅲ-11、Ⅲ-12、別にはがき類もある)。この中には、留学先で大変世話になる安達峰一郎フランス大使や、音楽学校の先輩であり、田谷力三・内田栄一・美子とともに四重唱団ヴォーカルフォアを結成し、美子が姉と慕う松平里子、留学の出資者である松本源三郎夫妻、その他、音楽学校やパリで師事した人々などの手紙

が含まれている。

このうち父母からの手紙は、自分たちの近況や身のまわりの細々としたことを記しており、昭和初期における横浜在住者の生活の一端を知ることができ興味深い。美子が出発した二八年は、昭和恐慌の直前にあたり、すぐに経済状況が大きく変化する。また、佐藤家があった鶴見は、二七(昭和二)年に横浜市と合併し、埋立地の工業化などにより地域が大きく変化している時期でもあった。父母の手紙には、これらを反映した様々な記述が見られる。このいくつかを紹介し、ある横浜市民が見た、昭和初期の生活・地域の変化を見ていこう。なお、手紙は年の記述が無い場合が多く、封筒が残されていないので、以下の年記述は内容から推測したものが多い。

まずは、美子の留学前後までの略歴を紹介しておこう。美子は、一九〇三(明治三六)年五月二五日、父友太郎・母ルキズの二女(兄三人・姉一人)として神戸に生まれた。父は、京都府が一八七七年にフランス・リモージュに派遣した留学生で、母ルキズと同地で出会い八九年に結婚している。一九〇九(明治四二)年、税関の鑑定官である父の転勤により横浜の官舎(現西区)に転居し、以後、一時期を除き横浜に在住した。同年、山手にある私立横浜董女学校に入り、一二(明治四五)年から一九(大正八)年三月卒業まで横浜紅蘭女学校に在籍(級外予科)

本科)し、この女学校時代に声楽を志した。この間、父友太郎は、一六年に青島埠頭局の勤務となり、母ルキズは一八年に同地で病死する。その後、二〇年に伊東夕子と再婚する。美子は、二二(大正一一)年東京音楽学校の予科に進み、二三年四月〜二六年三月本科、同四月〜二八年三月研究科において声楽を学んだ。二二年には、父が税関を退職し、官舎から鶴見の総持寺の北側に転居している。研究科在籍中から音楽活動を始めており、先に見たように二七年一〇月に結成したレスピアンヴォーカルフォア(後にヴォーカルフォア)などで活動していた。

「お山」の様子・鶴見の様子

佐藤家が転居した総持寺の北側は、「文化村」(『万朝報』神奈川版23・7・15)と呼ばれたこともある、大正一〇年代から開発された新興住宅地であった。父母は、家がある地域のことを「お山」と手紙には書いている。美子が出発した一九二八(昭和三)年頃は、まだ開発途上にあつた。

二九年一月には、「玄関前の池が全部うめられて見るかげもありません」(11・21※手紙の日付、以下同じ)と書き送っている。家の近くには、一八、〇〇〇平方メートルの寺谷大池があった。この用水池は、広く鶴見に水を供給していたが、大正末から埋立工事が始まり宅地に造成されている。周辺の宅地化は、急速に進んでいるようで、



埋立途上の寺谷大池(1/3000地形図「鶴見」部分 1927年測図、35年発行、横浜市役所、横浜商工会議所旧蔵資料)

「不景気の中にとん／＼進んで行くのは方々の山が宅地にかわります事」(30・6・9)と、不景気の中でも宅地化が進んでいると書いている。この影響の一つとして「近頃鶴見に火事がよくあります、〔略〕其三日目に綱島村に行く山の直ぐ下のソバ屋の裏二軒やけました、豊岡の方面はちよい／＼あります、是れ丈人間がふへたのです」と、宅地化・人口の増加が、火事の増加になっていると記している。

一方、不景気は「お山」にも大きな影を落としている。同じ三〇年六月の手紙には、「私宅の周囲は全部かわりました」と、五軒のうち四軒が入れ替わったと書いている。また、他の借家でも「家賃一年以上もとゞり実に困りの様子なり」との家があり、「世間が実に不景気だからお山も自然不景気」と書き送っている。

三一年一二月にも、「私達の此のお山も落伍者が追々と出来て来ます、表面にこそ表はれないけれど私達の様に苦しんで居る方があるのです」(12・7)と、この地を不況で離れていく人々が出ていていること、苦境の人々が他にも潜在していることを記している。

このような不況ではあったが、震災復興や工業化に伴う開発・基盤整備、合併による横浜市の基盤整備も行われていた。

先の三〇年六月の手紙では、「停車場の処、宅で買ふマンチュウ屋の処まで高架線のガードが出来ました、杉さんのお家の処など跡形もなく奇麗になって居ります、カスケードの横を潮田の方から高架で電車が通り多摩の方に行つて居ります」、また、一月にも「鶴見は住んで居るものはきうくして居りますけれど発展する事驚くばかり、総持寺門前は高架で電車が走つて居りますよ」(11・12)、三一年四月にも「高架の電車も昨年からおまんぢうやの前から走つて居ります、それはくよい景色です、只今停車場の所に大工事です、高く高架線を敷いて居ります、中々鶴見も賑かになりました」(4・9)と、繰り返し高架を走る電車のことを書いています。

はのろいです」(未・2・16)という状態であつたようである。

道路が整備されてくると、自動車の便も出てくる。三〇年には、「池のそばのそば屋の近くで魚よしが自動車屋にかわり宅にまいり居りました、番当が運転手になり宅に来て駅まで四十銭ですから高木が気の毒です、最近乗合自動車も通る様になります、発展はすばらしいですけど、お山の不景気つたらありません」(30・11・12)と、自動車屋(タクシー)ができたことを記している。「気の毒」と言われている「高木」は、おそらくは人力車の関係者であろう。

翌年には、「二月前から鶴見駅前より私達の沢の山の中腹まで五銭均一の乗合自動車も出来ました」と記している。これは、鶴見臨港鉄道のバスで、車掌が乗車するバスが通常であつた時代に、料金箱によるワンマンカーとして運賃を下げていた。しかし、不況下であつたために「僅か五銭でもやはりてくてく居る人が多いのです」(31・12・7)というように、五銭の料金でも歩く人が多かつたようである。

鶴見の物価と商店

この頃は、不況によりいろいろな価格が下がっている。これは東京の例だが、「服屋でも何でも毎月売出しばかり、それは安くになりました、今送ります錦紗も十四円で買ひました、余り安いから私が美ちゃんに上げます」や、

また鶴見でも「女中がたく山あります、月給は入りませんから食べる丈でと申込んで来る、(略)私も鹿児島から知人の娘さんを連れて来てならして居ります、高等女学校出五円与へて居ります、八月になりましたら八円位にいたします」(30・6・9)などと記されている。しかし、一方で「今は物価は下り万事が安くで済みますけれど税金はふへます、電話料など少しも下りません、納金の期日一日遅れましたら非常なやかましい事です」(30・11・12)、「それから電車賃は少しも安くありません、前と同じですから東京までの往復三等の六十銭が前の二等の乗車賃位に考へられますから東京に出ますのも一寸考へます」(31・12・7)というように、下がらないもの、実質的には値上がりするものなど不均衡であつた。

また、鶴見の物価の地域性についても書かれている。この地域は「東京でも横浜でもそれは安いのに鶴見豊岡丈は以前の通り、(略)京浜間で一番高い処と(物価)評される様になりました」とあり、物価が高いと評されていた。

このために、「少し考へて居る人は他に引越す様になりました」と転居する人も出てきていた。この高い物価に対し、美子の母は「ふんがい」し、近所の何人かも同様だとしながらも、周りには「割合に平気」という家もあり、商人の方でも「此のお山は高くするのだぞうな」と言っていると記す。この頃は、「御用聞き」が注文を取り、掛

け売りが普通であり、購入する店が決まっていた。商人側では、客を見て価格設定をしていた。そこで、「先日五六人集まって何とか致しませうやと相談したけれど、真際にやる人の数が少いからやっぱり商人にまけて居る」ので、人によつては、東京や横浜に出た時に買ひ物を済ませ「豊岡から少しも買はず」と自衛し、佐藤家でもなるべくそのようにしていたようである(30・6・9)。

このような物価高は、地域の有力者や商人も認識しており、この頃に「鶴見名物」と言われるようになる私設の小売市場が、いくつも設置されている。母の手紙でも「此のせまい鶴見でさへ美ちゃんが行きましてから四軒の大きな公設市場が出来て居りますから、小さな店はどんく倒れる一方です」(31・12・7)と、小売市場の増加と従来の小売店の苦境を記している。

佐藤家の生活と留学費用

次に、手紙に書かれた佐藤家の生活を垣間見てみよう。

父友太郎は、税関を退職した後、横浜正金銀行等いくつかの会社で仕事をしていたようで、留学出発当時の二年では木下組の顧問をしていた。恩給と顧問報酬が生活の基盤であつた。

もともと佐藤家の生活水準は高く、横浜税関時代には、鑑査官として「税関長の給料を上回るものであつたようである」(「カルメンお美」二三頁)と



佐藤美子 バリPetit Palais(プティ・パレ)のそばで 1931年7月(佐藤美子資料)

の地位にあり、昭和初期では、先に見たように電話を備え、「女中」を雇い、また、ラジオを所有し、読売新聞と東京日日新聞の二紙を購読していた(31・

8・20)。地域のラジオ契約者は三〇年に約一〇パーセント、電話加入者数は二八年に一万人強、鶴見局は六三九人であった。また、美子の音楽活動もあり、東京などの演奏会へも定期的に通っていた。

一九三一(昭和六)年四月の手紙を見ると、月に恩給一五〇円、顧問料一〇〇円の計二五〇円の収入に対し、家屋の返済金の七四円が「まだ三年もあり」、別の手紙では「償還金(※返済金のこと)地代掛り金等」で一〇〇円以上となるとしているので(30・11・10)、普段の生活は、月に一五〇円位の中で行っていたのであろう。このような生活の中で美子は留学している。

ところで、美子の留学費用がどのくらいであったのか見てみよう(資料番号II-二六九-四)。約三年半の留学期

間の総額は一八、一二〇円、このうち、往きの船賃と帰りのシベリア鉄道などの費用が三、〇〇〇円、残りの一五、一二〇円は生活費や講師代などとなり、月に四二〇円であった。この費用の大部分が、援助者の松本源三郎からの貸与であった。帰国後の証書では、松本からの借用は一四、四〇〇円

となり(「カルメンお美」四五〜四六頁)、七二〇円は別に工面していた。この中には、美子自身の収入、父母や次兄からの送金などがあつた。

不況は、佐藤家にも大きな影響を与えている。三〇年初頭から、木下組の経営難がたびたび手紙に記されるようになり、遂に三二年五月には、顧問料が打ち切りとなってしまう。佐藤家では、この事態を見越して、三〇年後半頃から新たな収入源を模索している。

既に儉約は「今は東京に行くのさへ月に一度位と決めて余程の事でなければ二人共出ません、そして真当の生活のみに逐はれて交際などには少しの余裕もありませんので品物も既に不用のもの売りも致しましたけど、そうもつゞけられませんか何とかせねばならんと工夫も気根も尽きて居ります」(30・11・12)との状態であつた。そこで「当山の組合の規則がかわり土地を利用してよいと云ふ事」になつたので、借家を建てることにした。住宅組合と思わ

れる組織の規則が変わり、自宅以外にも活用できるようになつたようである。先に見た返済金も、この組合からの借入であつた。

翌三一年になつて、パリの美子から歯の治療費を送つて欲しいとの連絡が来たので、組合から借家建築分一、〇〇〇円、家の修理代の名目で四〇〇円を借り、帰国後に美子が返すことにして四〇〇円を送金した(31・5・1)。

この一、〇〇〇円と手元のお金若干で建築する一五坪の借家は、佐藤家の計算では、家賃二五円位になると、返済等を差し引いて一〇円が残ることになり、七二円の返済金が六二円になるので、少しは楽になると書き送っている。

周辺の家々でも、同様に借家経営に乗りだしているとも書かれている。この後、オペラコミックのオーディションや、帰国後のことの記述が多くなり、この借家の顛末は分からない。

最後に、三一(昭和六)年暮れ、久しぶりに銀座に出た母の買い物を紹介しよう(31・12・7)。同年九月、美子が姉と慕う松平里子がミラノで客死し、一二月に遺骨が帰国、六日に東京駅へ出迎えに行き、そのついでに銀座へ廻つた。

当時の東京も不況下で、「大きなデパートで小供用の菓子は一袋十銭五銭と云ふ風になつて居ります、たまに二十銭のものがありまして中々売れません」、「タクシーも五十銭です、然し東京駅から九段あたり迄なら三十銭で

喜んで乗せませす、けれど空自動車の洪水です、こんな風で安くしても乗り手が無い買い手が無いと云ふ風です」との状態であつた。銀座でも、「イルミネーションを利用しあらゆる広告で実に奇麗賑かなものです」と華やかであつたが、「こんなにして景気を付けても見て歩く人のみが多い様」であつた。

午後四時五五分着の列車を出迎えた母は、その後、「美ちゃんの知つて居る頃は三十銭で安い方でしたね、あれが只今は十銭均一」となつた食堂で夕食をとり、その店で一二個入り三〇銭のシュークリームを買つて、松屋に行きナマコー折り二〇銭・目ざし一〇銭を購入、松屋の無料送迎バスに乗り新橋駅に出て帰宅している。一二個のシュークリームを「大事に食べて居ります」と記している。

一九三二(昭和七)年六月、美子はシベリア鉄道経由で、少々トラブルがあつたが、無事にフランスから帰国した。東京駅に降り立ったがたは、大きく新聞に報道された。帰国後、最初の独唱会は、六月一六日時事新報社主催により日比谷公会堂において行われ、同年に映画「花の東京」に出演するなど、活躍していくこととなる。

【参考文献】

矢野晶子「カルメンお美」(有隣堂、一九八八年)、『鶴見区史』(鶴見区史刊行委員会、一九八二年)、サトウマコト「鶴見線物語」(230クラブ、二〇〇三年)、『横浜市営交通八十年史』(横浜市交通局、二〇〇一年)。

(百瀬敏夫)